

壬生六齋念仏由来

1. 踊念仏

六齋念仏の端緒は踊念仏(おどりねんぶつ)にあるとされます。

踊念仏とは飢饉や疫病に苦しむ人々を救うため、念仏を分かりやすく民衆に伝えようと採用された宗教的手法のことです。

鎌倉期に一遍が開いたという時宗はこの流れに属しますが、六齋念仏はそれより以前の平安時代に空也が始めたものをその源流であると伝えています。

壬生六齋念仏講中でも、空也上人が托鉢に用いる鉢を叩いて、「南無阿弥陀仏」と唱えながら市中を練り歩いたという伝承に起源を求めています(空也堂系)。

なお、踊念仏はその後、鉢や瓢箪を鉦や太鼓に替え民衆達が集まってくり返した過程で次第に独自の文化的発展を見せ、このあたりの時点から娯楽色を帯びる傾向が現れたので、それらを**念仏踊り**と呼んで区別します(六齋念仏で言うと、後述の念仏六齋から芸能六齋への展開に対応するでしょう)。

(※空也上人の詳細は、[こちら](#)を御参照ください)

2. 六齋念仏

仏教には、四天皇および太子の世間案行の日には悪鬼などが勢いを得て人をうかがう(災いをもたらす)ので、特に齋戒謹慎し仏の功德を修し鬼神に回向して善心を発起すべきであるという考え方があります(大智度論)。そして、ひと月の内、8・14・15・23・29・晦日の6日間がその日に指定されました。これらの日を**六齋日**と呼びます。

この語の日本での文献上の初出は日本書紀で、持統天皇の5年(691)2月の、公卿らに詔して六齋を行わしめた、という記事です。

踊念仏はいつしかこの六齋日と結びついて、今日に至るまで通例呼び慣わされているように、**六齋念仏**と呼ばれるようになっていったとされています。「六齋」と「念仏」が接着して記載されたはじめは、延徳2(1490)年の西福寺板碑文であり、京都の六齋念仏最古の資料は、『言継卿記』永禄10(1567)年の記録であると言われています。

六齋念仏と踊念仏の差は明確ではありませんが、六齋念仏が踊念仏よりも何らかの形(おそらく音楽的な部分)で進化した形式であったがため、新しい名前があえて冠せられたものと解されます。もっとも、六齋念仏を厳密に定義することは難しく、実際に「踊念仏」「空也念仏」「鉦講」「六齋太鼓」などと呼び、六齋念仏と呼ばない場合にもほぼ共通の内容であることが多々あります(但し、後述の芸能六齋は含まず)。おおよその指標として、念仏の詠唱が歌うような節回しであること、数人で唱和すること、動き(踊り)が付くこと、鉦の演奏が際立つこと、手持ちの太鼓が用いられること等が挙げられますが、一概には言えません。

六齋念仏は、いつごろからか、盂蘭盆の信仰と深く結び付けて考えられるようになり、ほとんどの六齋団体の活動が現在はずっかりお盆の行事の一環という位置に定着しています。したがって、六齋念仏と六齋日との接点は全くありません。

[次へ](#)

[もどる](#)